

令和2年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和2年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

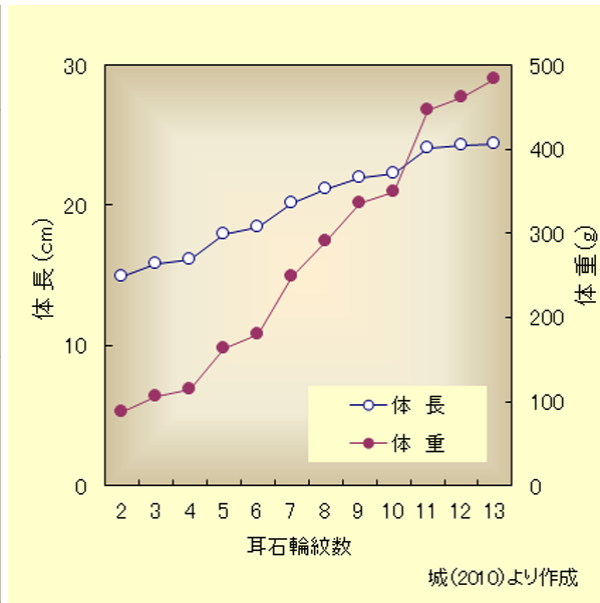
海域名 オホーツク海南部

担当水研 水産資源研究所



生物学的特性

寿命： 太平洋北部海域では20歳程度だが、本海域では不明
成熟開始年齢： 不明
産卵期・産卵場： 北海道沖の産卵盛期は4月～5月だが産卵場は不明、サハリン東岸の産卵期は5月～10月で産卵場は水深400m～1,100m
食性： 魚類、クモヒトデ類など
捕食者： 不明

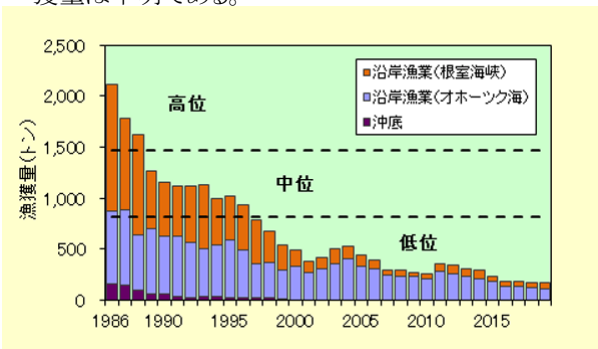


漁業の特徴

はえ縄、刺網(併せて沿岸漁業)と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲される。1996年以降、オホーツク海において、ロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態は不明である。

漁獲の動向

1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、2001年には375トンまで減少した。その後増加し、2004年には533トンとなったが、再び減少し、2019年は過去最低の174トンとなった。オホーツク海と根室海峡、沖底と沿岸漁業のどの海域、漁業においても、漁獲量は長期的に減少傾向にある。特に、沖底は近年ほとんど漁獲していない。ロシアの漁獲量は不明である。



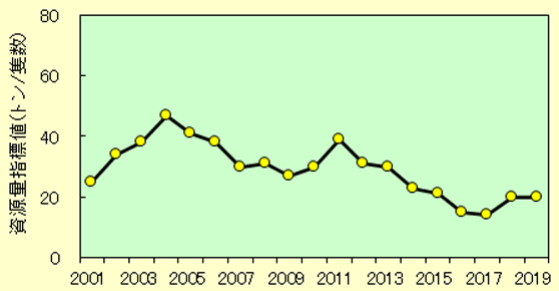
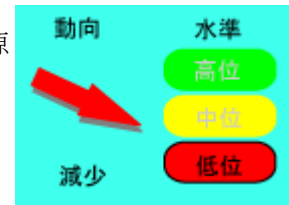
資源評価法

長期間のデータがそろっている1986年～2019年の総漁獲量の推移に基づき、資源水準を判断した。オホーツク海におけるはえ縄漁業の2001年～2019年の操業隻数は、ゆるやかに減少しながらも2隻～4隻と安定していることから、は

え縄漁業の操業隻数あたりの漁獲量(CPUE)を資源量指標値として資源動向を判断した。

資源状態

過去34年間(1986年～2019年)の漁獲量の最高値～最低値を3等分し、上から高位、中位、低位とした。2019年の資源水準は低位、また、最近5年間(2015年～2019年)の資源量指標値の推移から、動向は減少と判断した。



網走水産試験場(印刷中)より作成

管理方策

本資源は系群構造が不明な跨り資源であることからABCの算定を行わず、漁獲量および延縄漁業のCPUEを基に、資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として、2021年算定漁獲量を提示した。本資源の資源状態は低い水準にあると考えられるが、漁獲量とともに操業隻数が減少し、資源状態を判断するための情報も限定的になりつつある。精度の高い資源評価にむけて、生態・資源調査の充実を図るとともに、ロシア船を含めた漁業実態の把握に努める必要がある。

管理基準	Target/Limit	2021年算定漁獲量(トン)	漁獲割合(%)	F値(現状のF値からの増減%)
0.7・Cave3-yr・1.17	Target	120	—	—
	Limit	150	—	—

- ABCではなく算定漁獲量とした
- ABC算定規則2-1)により、 $Limit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の回復が期待される漁獲量
- $Target = \alpha \cdot Limit$ とし、係数 α は標準値0.8
- δ_1 は0.7(低位水準における推奨値)
- $\gamma_1(1.17)$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算した。kは標準値の1.0とし、b(3.00)とl(18.00)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2017年～2019年))である
- CtはCave3-yrとし、2017年～2019年の平均漁獲量
- 2021年算定漁獲量は、10トン未満を四捨五入して表示

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少

管理方策のまとめ

- 資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として、2021年算定漁獲量を提示した
- 精度の高い資源評価にむけて、生態・資源調査の充実を図るとともに、ロシア船を含めた漁業実態の把握に努める必要がある

執筆者: 濱津友紀・千村昌之・境 磨

資源評価は毎年更新されます。